

食と地方と農のパラダイムが変わる

農業から・アグリコミュニティビジネスへ (雑誌「カイラス」6月号より)

構成・文 LBA アグリ・コミュニティビジネス研究会 (大和田順子&田熊秀美)

先進国中最低の食糧自給率、食の安全性への不安、衰退する農山村……。こうした危機を脱するには、この10年が鍵。各地で始まりつつある新しい農業、都市と農村の交流、農商工連携、自治体・NPO・企業など複数セクターによるコンソーシアム。アグリ・コミュニティビジネスが新たな“公(コモン)”を創り出す。

農業の制度も、消費者の意識も大きく変わりつつある

「ギョーザ事件」をきっかけに、肉も野菜もできるだけ国産のモノを食べよう。どんな人がどのように作っているのか、はっきりしているものを食べようという行動への移行が顕著だ。そして、これまで日本では1%にも満たなかった有機農産物についても、ついに「有機農業の推進に関する法律」が制定され、今年から全国で推進・啓発活動が始まる。また、農業生産管理手法のグローバルスタンダードとして注目されているGAPについても、例えば大分県が今年から導入に向けて取り組みを始めるなど、健康や環境に配慮した農業へのシフトは不可逆的だ。

消費者の関心は、農産物の安全性については最早当たり前のこととなり、それに加えて食料自給率の向上、農山村との交流や農的生活への関心が高まっていることも見逃せない。「都市と農山漁村の共生・対流」(2006年、内閣府調査)について、「共生・対流というライフスタイルを实践したい」、あるいは「二地域居住の願望がある」といったニーズは高く、農を暮らしに取り入れ、豊かな里山を次世代につなぐ活動に参加していきたいという。

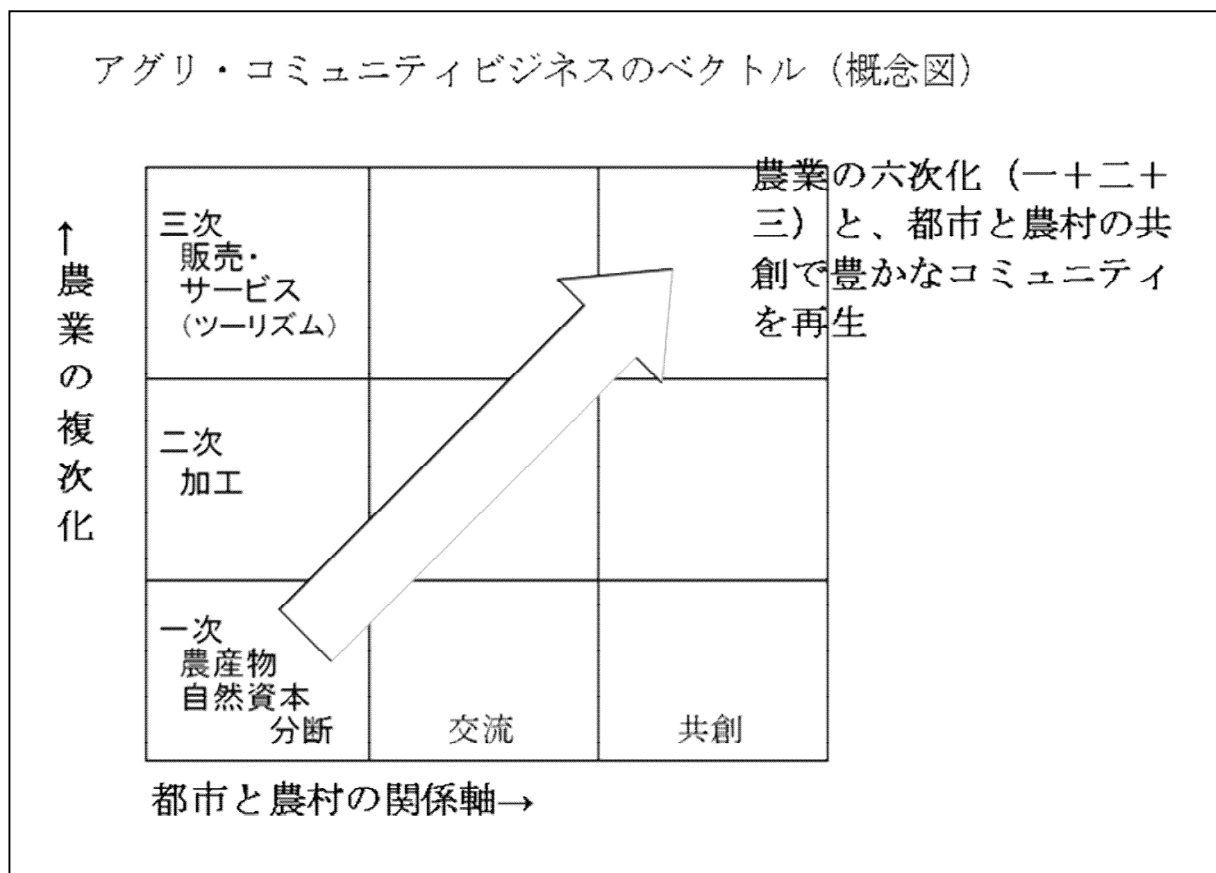
新しいプレーヤー、発想が、大きな潮流を作りはじめた

こうした消費者の意識や制度の変化を受けて、生産者サイドでも新しい動きが続々と始まっている。次ページの「アグリ・コミュニティビジネス最前線MAP」では、農家、農協、企業、NPOなど、様々な主体が、行っている様々なタイプの農関連の事業やプロジェクトを紹介している。

全国各地で20年以上をかけて、地道に地域発のブランドづくりを成功させた「伊賀の里もくもくファーム」、「高知県馬路村のゆず」、「宮崎県綾町の有機農業」など農を中心とした地域づくりのフロンティア。若者や企業の社員を呼び込む「関東ツーリズム大学」や、都市住民に野菜作りを体験させる「農業体験農園」も着眼点が新鮮だ。企業では、食品メーカーや居酒屋チェーン、人材派遣会社など大手企業がすでに農業分野に参入していることは知られているが、百貨店子会社「阪急泉南グリーンファーム」による有機JAS野菜の生産や、機能性野菜というプレミアムカテゴリーを創出しようという「ベジフルーツ」など着眼点が新しい。また、農家自身による取り組みでも、農家の収益性の向上を追求しつつ、会員制度などを通じて消費者との交流を行う直売所「みずほの村市場」や、農家と域外居住者の交流で小規模稲作農家を支える仕組みづくりに取り組んでいる「米子の米プロジェクト」なども注目だ。

農商工連携、都市と農村の共創で、新たな、“公(コモン)”を創出

このような新しい農関連の事業や取り組みを、私たちは“アグリ・コミュニティビジネス”と命名した。それは、有機農業やGAPなど、より一層安全で確実な農法や生産管理手法を採用し、企業の発想で生産手法を革新し、マーケティングを取り入れる。また、農産物の生産にとどまらず、食品への加工やツーリズム、農業体験との融合による6次産業化や、農商工連携を進める。そして何より、そこにしかない自然資本（里山、森林、河川）や、食文化、生活文化といった地域力と、都市居住者と地元居住者の交流力を組み合わせた、いわば“アグリ・コミュニティビジネス”という新しい“業態”となり、新たな“公(コモン)”を形成し、地域再生を担っていくのではないだろうか。



<全国の事例>

1. 伊賀の里モクモク手づくりファーム(三重県伊賀市)

<http://www.moku-moku.com/>

進化を続ける食と農の体験型6次業態

1988年、人口8,000人の山村で、養豚農家を中心に、安心・安全でおいしいハムを作ろうと工房が設立された。養豚に始まり、ハムやソーセージの加工、地ビールを生産。95年には自然や農業を体験できる「モクモク手づくりファーム」を開設。ソーセージの手作り教室が人気に。温泉や宿泊施設もあり、年間約50万人を集客する。02年には隣の三重県四日市市内に農場レストランをオープン。野菜の直売所、滞在型食農学習施設、貸し菜園など、観光や教育分野にまで事業を拡張。今年20周年を迎え、売上35億円超。農場レストランを県内外に7店運営。

2. 「農業体験農園」(東京都練馬区)

<http://www.city.nerima.tokyo.jp/sangyo/noen/taiken.html>

都市生活者の農への理解を促す体験農園

「農業体験農園」は、東京23区内の練馬で農業を営む白石好孝さんらが1996年に始めたもの。会員は年間3,100円で30㎡を借り、20~25種類の農産物を減農薬で育て、収穫できた農作物は持ち帰る。農家には年間450万円程度の収入になり、参加する会員には新鮮な農産物が手に入るとともに、農への理解が進む。地元の小学校に農産物を直接販売する他、農園内にレストランも運営するなど都市内専業農家の安定的経営手法を追求する。この方式は08年4月現在、都内50か所、参加会員数も2,000世帯を超える。今年度からは、大阪や名古屋でもこの方式が始まる。

3. 宮崎県綾町

<http://www.town.aya.miyazaki.jp/ayatown/agriculture/index.html>

日本一の照葉樹林と有機農業の里づくり

宮崎県の中央に位置する中山間地だが宮崎市からは20kmという立地。総面積の80%が森林で、9%が農地。照葉樹林を中心とした天然林は全国一の規模。人口は7,500人程度だが、年間に100万人を超える観光客が訪れる。1988年に自然生態系農業の推進に関する条例を日本で最初に制定し、89年には有機農産物の認定制度を導入。前町長の郷田實さんは、地域のシンボル照葉樹林の伐採計画を阻止。大量生産・大量消費時代の終焉を予見して、「一坪菜園運動・一戸一品運動」にも着手した。直売所「綾・ほんものセンター」(年間売上約3.5億円)も人気。

4. 北海道クリーン農業・有機農業推進プラン（北海道）

（北海道クリーン農業推進協議会）<http://www.agri-clean.gr.jp/yesclean/>

有機農産物へのシフトを始める大生産地

農産物生産量全国一位の北海道は、冷涼な気象や広大な土地を活かし、90年代初頭から農薬や化学肥料の使用量を3割程度減らす「クリーン農業」に取り組んできた。農産物には「YES! clean マーク」を貼り消費者への普及にも努めている。06年からは有機農業も推進。

5. 鳴子の米プロジェクト（宮城県大崎市鳴子温泉地区）

<http://narugo.goزارu.jp/naruko-kome.html>

小規模米農家と生活者の支えあい

鳴子は、秋田県、山形県に隣接する県境の中山間地。“米”は人の命をつなぐもの、地域の暮らしの基本として、「鳴子の米」を地元居住者、温泉に集う旅人など関係者が小規模農家を支援。プロジェクト2年目の07年は、3ha、22人の農家が参加し、400人が米を購入。

6. 関東ツーリズム大学（山梨県北杜市）

<http://tourism-univ.net/>

一都十県の農山村がキャンパス

「NPOえがおつなげて」が今年から始めるプロジェクト。都市に住む人々に、関東圏の農山村にて様々な体験や交流の機会を提供。地域とのふれあいから、その土地の価値を見出し、魅力を感じることによって、本質的な生きる力を身につけることができると発想。

7. 日本ベジフルーツ（生産地は全国。本社は東京都渋谷区）

<http://www.veggiefruits.co.jp/index.html>

プレミアム野菜というカテゴリーを創出

昨年3月に設立された高機能野菜の生産会社。「アナスタシア」というカラフルなピーマンを始め、各種トマトを扱う。生産から販売までのトレーサビリティ管理体制を整え、品種改良で栄養価の向上を図り、見た目に美しく、おいしいというプレミアム野菜を提供。

8. 多古町旬の味産直センター（千葉県多古町）

<http://www.tako-syun.or.jp/>

「しんのみ畑」で都市住民と農村の交流

2001年から毎秋、まち全体で農・食育イベントを開催。「しんのみ」とは味噌汁の実という意味で、

農家が自家用に作っていた無農薬の野菜のこと。活動の核となる産直センターは現在 200 軒の農家が参加し、野菜セット週出荷数 8,000、年間契約の米作りの会員が 6,000 人。

9. みずほの村市場（茨城県つくば市）

<http://www.mizuhonomuraichiba.com/>

農家の収益性、野菜の栄養価の向上に注力

東京から約 50 km。1990 年に農家の長谷川久夫さんが中心となって直売所を開設。毎年売り上げを伸ばし、07 年度は 5.4 億円に。古民家の蕎麦屋もあり、会員 11,000 人、年間利用客 27 万人。45 軒の生産農家の平均売上は約 800 万円。土壌診断による適正な施肥技術や GAP も取得。

10. 南信州観光公社（長野県飯田市下伊那地区）

<http://www.mstb.jp/>

“ほんもの体験”を地域が連携して提供

長野県南部の 15 市町村と民間団体からなる公社は、2001 年に設立され、体験型のエコ&グリーンツーリズムを提供している。伊那谷の大自然と、そこに暮らす人々の参加により、アウトドア、食文化、農林業、伝統工芸、環境学習の 5 分野で約 160 のプログラムを実施。

11. 阪急泉南グリーンファーム（大阪府泉南市）

<http://www.hankyu-qc.co.jp/yasai.html>

新発想で異業種が有機農産物を生産

2003 年に設立された阪急百貨店の子会社。立地は大阪の中心地まで車で 1 時間。8,000 m²の敷地内でベビーリーフなどを生産。有機 J A S を取得するとともに、生産効率、作業のしやすさなどに配慮した生産手法は注目。年間売上は〇千万円で 3 年目から単年度黒字化。

12. コウノトリ育む農法（兵庫県豊岡市）

<http://www.city.toyooka.lg.jp/www/genre/000000000000/100000001046/index.html>

生物と共生する農法で生態系を回復する

丹後半島の付け根、京都との県境に位置し、国内唯一コウノトリ生息地域。人工飼育された鳥が野生に復帰し、19 羽が舞っている。越冬できるよう冬期灌水とし、無農薬で多様な生物が生息する田んぼを創ろうと「コウノトリ育む農法」が 2005 年から全市域で始まった。

13. からり（愛媛県喜多郡内子町）

<http://www.karari.jp/>

農村女性の経済的自立モデル

1986年から官民で「知的農村塾」を開講し、今日まで継続している。その中から生まれた事業が直売所「からり」だ。住民も出資し、女性たちが中心となり、商品開発や販売、運営を担う。94年以来築いてきた顧客と信頼関係が年間利用者60万人、売上6.7億円に結実。

14. 馬路村農業協同組合（高知県馬路村）

<http://www.yuzu.or.jp/>

ゆず一筋。くねくね道を通して全国から来村

徳島県との県境に位置する人口1,120人の山村。馬路村農協では、特産のゆずを加工し86年にポン酢しょうゆ、88年にユズジュースを発売。百貨店での展示即売や通販などで顧客を地道に増やし、〇年のテレビCMで大きく飛躍。05年には売上げが30億円を超えた。

15. ぶどうの樹（グラノ24K）（福岡県遠賀郡岡垣町）

<http://www.budounoki.co.jp/>

農園からレストラン、ウエディングまで

福岡と北九州の間に位置する、山と海に囲まれたフルーツの産地。1962年に先代社長の小役丸卯太郎さんが減農薬の葡萄を作り始め、94年に葡萄の樹の下で食事をするレストランを開店。2002年からはビュッフェレストラン、デリなどを全国の商業施設に23店出店。

以上